

鈴鹿山麓におけるフクロウの繁殖時の餌動物相

要旨

鈴鹿山麓に生息するフクロウ (*Strix uralensis*) の繁殖期の餌動物相の解明に迫る。フクロウは食べたもののうち消化できない骨や毛をペリットと呼ばれる塊にして吐き出す習性があり、繁殖後の巣箱内には、雛が吐き出したペリットや残渣が多量に残される。本研究では、これらの餌となった動物の骨や残渣から餌動物種の同定を試みる古くから行われてきたペリット分析に加えて、巣箱にカメラを設置しフクロウの給餌の様子を録画して画像解析する新たな方法も用いて、より詳細に子育てに必要な餌動物種を明らかにした。

1. 研究の動機と目的

多くの人に親しまれるフクロウは高い知名度がある一方、夜行性であるがゆえにその生態の多くが不明である。三重県では準絶滅危惧種に指定されており、三重のフクロウを保全するために効果的な方法を見出すことが望まれている。日本の森林生態系のアンブレラ種であるフクロウを守る取り組みは広義には生物多様性保全の一助を担うと考える。私たちはフクロウが子孫を増やす繁殖期に注目し、雛を育てるために必要な餌動物相の解明に取り組んだ。

2. 方法

- ①フクロウの繁殖地の環境を把握するため現地調査の実施
 - ②繁殖後の巣箱内に残されたペリットや残渣物の分析
 - ③繁殖中の巣箱内および巣箱外に設置したネットワークカメラによる録画画像の解析
- ※ふ化から巣立ちまで36日間のうち、28日間の画像解析を実施

3. 結果

【巣箱内ペリット等分析】

分類	餌動物	個体数
哺乳類	ネズミ科	24
	リス科	1
	モグラ科	14
	トガリネズミ科	4
	コウモリ	1
両生類	カエル	58
鳥類		4
その他	ムカデ	1

【映像分析】

分類	餌動物	個体数
哺乳類	ネズミ科	35
	リス科	1
	モグラ科	6
	トガリネズミ科	2
	コウモリ	1
両生類	カエル	94
鳥類		18
その他	ムカデ	6
種不明		5

4. 考察

映像分析と比較してペリット分析の方が、餌動物種の各個体数が少なく計数されることが分かった。一方、赤外線による白黒画像では種の同定が困難であるが、ペリット分析では小型哺乳類の下顎骨を用いることで種の同定ができるものがあった。いずれにせよ、この巣箱を利用したフクロウは、カエルが最も多く、ネズミ、トリ、モグラ、ムカデなど様々な餌動物を給餌した。

フクロウ保護に必要な要素として、①生息環境の保全、②餌動物の確保、③繁殖のための樹洞の存在などがあげられるが、三重県民の森のような自然環境で繁殖し、何でも食べるとなると、人口林が多く繁殖に適する樹洞が少ない県北部では、巣箱の設置が最も効果的であることが示唆された。今後、他の地域の巣箱においても検証したい。

5. 参考文献

- ・河村善也『日本産の第四期齧歯類化石—各分類群の特徴と和名および地史的分布—』愛知教育大学研究報告, 40(自然科学編) P91~113 February, 1991
- ・酒井琢朗 花村肇『食虫目の歯の形態学的研究』歯基礎誌 15:333-346, 1973
- ・阿部 永 日本産哺乳類頭骨図説 北海道大学出版会, 2000